

今週の相場はどうなる？ 今週の相場はどうなる？

作成者：山根亜希子

○7月31日～

先週は、米国が政策金利を0.25%引き上げ、日本も長期金利の変動幅の運用を柔軟化し、0.5%の上限を超えることを容認すると決めました。

これは、今まで0.5%を上限としてきた長期金利を1%程度までは容認するというもの。

植田・日銀総裁は会見で「長期金利が1%まで上昇することは想定していないが念のための上限、キャップとして1%とした」と述べました。

このYCC(イールドカーブ・コントロール)の運用の柔軟化は為替市場の変動を抑える目的もあるようです。

日銀の政策発表の前後で為替も株価も大きく乱高下するような動きになりましたが週末の終値で見るとかなり戻して終わっています。

米国株も堅調でNYダウは13連騰と記録的な強さを見せました。

FOMCではややハト派的なコメントも見られ、インフレも落ち着きつつあることで米国株については楽観的な雰囲気があります。

為替相場は、テクニカル的に見るとドル/円はレンジの中を上下に激しく動いただけで、トレンドが発生したというような動きにはなっていません。

今後の政策についてですが米国も欧州も次回の利上げについては据え置きもあり得るということで、経済指標の結果次第となりそうです。

日本の政策はわかりにくい面が多いですが基本的には緩和策を維持するための措置ということで、金融緩和をやめる方向へ一気に動き出したというわけではありません。

しかし、長期的には政策変更を行っていくということでしょう。

長期金利については、ある程度市場に任せるという判断だと思います。前回長期金利が1%だったのは2012年頃です。

日銀については、次回以降も政策変更をどんどん進めるということはないと思うので、しばらく現状維持が続くとすれば為替相場も海外要因で動くことが多くなると思います。

今週は米国で重要指標の発表が多く、結果次第で動きが出る可能性もあります。

オーストラリアと英国では政策金利の発表がありますが両国とも利上げの予想となっています。

● テクニカルで見た重要ポイントは？

<ドル/円>

先週のドル/円は141円台から急落し、138円あたりまで下げた後、終値では141円台まで戻しているので、週足の終値ベースで見るとほぼ動いていない状態です。

今週の相場はどうなる？ 今週の相場はどうなる？

金融政策の発表前後で大きく乱高下しましたがトレンド的に見ると137.6—142円をブレイクするまではレンジ相場ということです。

ひとまず、大きなイベントを通過し、極端に円高になる要因はなくなりました。

米国もまだ利上げ余地があり、日本は金融緩和維持ということなので、ドル高を試しにいく動きが出る可能性があります。

21日の高値の141.95円を超えて、142円にのせてくると143円台後半が視野に入ってきます。

144円あたりには抵抗がありますが超えれば145円トライの動きがでそうです。

下値は、140円あたりにサポートがあります。

ここを割り込めば138円台まで下がるリスクが出てきます。

<気になるクロス円>

クロス円の多くのペアも先週は週の真ん中で下げて、週末に急激に戻すという行って来い相場となりました。

ユーロは156円を超えてくると2回頭打ちとなっている158円が視野に入ってきます。

158円を超えれば160円がターゲットに入ってきますが3回頭打ちとなれば下落リスクが高まるので注意がいります。

オセアニア通貨は、他のペアに比べて動きが弱く、先週前半の高値あたりまで戻していません。

週足の形もどちらかという下落を示す形が続いているので、高値買いは避けたいです。

*クロス円とは円との通貨ペアの総称：〇〇／円というような通貨ペアのことです。

<今週のファンダメンタル？>

日本では6月鉱工業生産、日銀・金融政策決定会合議事要旨などがあります。

米国では7月シカゴ購買部協会景気指数、7月製造業PMI(改定値)、7月ISM製造業景況指数、6月雇用動態調査(JOLTS)求人件数、7月ADP雇用統計、前週分新規失業保険申請件数、7月サービス部門・総合PMI(改定値)、7月ISM非製造業景況指数、6月製造業新規受注、7月雇用統計などが発表されます。

欧州ではドイツでとユーロ圏で6月小売売上高、7月製造業・サービス業PMI(改定値)、ドイツで6月製造業新規受注、ユーロ圏で4—6月期GDP(速報値)、7月消費者物価指数、6月卸売物価指数などがあります。

ほかにはオーストラリアと英国で政策金利、英国で英中銀金融政策委員会(MPC)議事要旨の発表などがあります。